

論文

養護学校義務制前後の教育課程編成の変遷 — D校の教育課程編成の変遷 —

齋藤 一 雄*

埼玉県における養護学校義務制前後の知的障害養護学校の教育課程編成について、学校要覧をもとに調査した(齋藤, 2012)。そのなかで、教育課程の関連図を示していたB・D・E校の教育課程編成の変化について、いくつかの時期に分けて概観した。D校は1975年に市立校として開校し、教育課程の構成はほぼB校と同様のものではあった。養護学校義務制後、1981年には総合学習を基本におきながら「領域・教科を合わせた指導」と「教科指導」に分けて示し、以後、「埼玉県教育課程編成要領」にそった枠組みで週授業時数が学校要覧に掲載された。1985年には新校舎が建設され、1986年の学校教育目標には、「児童・生徒一人一人の可能性」と「実践的人間を育成する」の文言が加わった。また、各具体項目に「ア. 健康 イ. 知恵・自立 ウ. 意志 エ. 情操 オ. 協調」のタイトルがつけられた。1989年には、教育計画の立案と指導の方針として、「学校教育目標の具現化、個性化をめざして学部経営にあたる」「一人一人の子どもを中心にすえた指導をする」「子どもに即応した指導をするために多様な学習活動を展開する」が示され、以後引き継がれている。また、開校以来研究紀要を発刊し、「生き生きとした学校生活をめざす教育課程の研究」をテーマとした実践研究を進めてきた。2004年からは週授業時数が領域・教科を合わせた学習、教科別の学習、領域別の学習、総合的な学習の時間の枠で掲載され、現在に至っている。校舎建築の際に各学部別の生活ゾーンに分け、「学校教育目標の具体化、個性化をめざして学部経営にあたる」とあるように、各学部を中心に実践化してきたことが大きな特徴であることがわかった。

キー・ワード：知的障害 養護学校 教育課程編成

I 問題と目的

知的障害養護学校における教育課程に関連した研究では、学校教育目標、教育方法の変遷、生活単元学習や作業学習の考え方と実践の変遷、自校の教育課程編成と具体的な実践などをまとめたものはある。しかし、養護学校義務制前とその後の教育課程の変化について述べているものは少ない。教育課程の問題よりも、就学指導や通学(スクールバスなど)、重度・重複化、高等部の設置、教師の専門性などの問題が取り上げられていることが多い。

養護学校義務制前後に設置された知的障害養護学校は多いが、都道府県によってその状況は異なる。養護学校義務制前とその後の教育課程の変化について、県独自に教育課程編成要領を作成し、教育課程編成の考え方や基準を示すとともに、指導事例を紹介している埼玉県を対象に、学習指導要領の変遷と埼玉県特殊教育教育課程編成要領(以下、編成要領とする)の変遷をみてきた(齋藤, 2012)。また、養護学校義務制前後に設置された知的障害養護学校の学校要覧等を資料として、学校教育目標、指導の形態、週日課等について概観した。その結果、教育課程の関連図を示している学校は3校のみで、指導の形態や週日課はまちまちであったり、毎年変化したりしていた(齋藤, 2012)。

さらに、教育課程の関連図を示している3校を個別に検討することにした。埼玉大学教育学部の附属校であるB校は、埼玉県の特殊学級を中心として実践が展開されてきた頃の考え方を引き継ぎ、総合学習をもとに教育課程が編成されていた。ま

た、学校研究で教育課程に関するテーマを掲げ、その結果を反映しながら教育課程を修正してきたことがわかった(齋藤, 2013)。

埼玉県立E養護学校は、養護学校義務制以前に開校され、比較的校独自での考え方で教育課程編成がなされていた。障害の重い子どもたちから入学させるという基本方針で出発し、就学猶予・免除の子どもや寝たきりの重度児も可能な限り受け入れた。そのため、子どもたちの実態の幅が大きく、学校研究と教育課程編成をタイアップして重度重複児の教育課程を含む3段階の教育課程を示し、その後、学習集団と対応した3段階の教育課程の構造図を作成してきたことがわかった(齋藤, 2014)。

そこで、さらに、教育課程の関連図を示しているD市立D養護学校(以下、D校とする)の教育課程編成の変遷について、学校要覧と30周年記念誌等を収集し、4つの次期に分けて概観することにした。

II D校の教育課程編成の変遷

1 開校から養護学校義務制まで(1975~1979)

D校は、1969(昭和44)年に障害児を持つ「親の会」が結成され、全員就学に向けた運動が展開されことから、1970(昭和45)年にD市の4校の特殊学級在籍児のための「共同学習場」が開校されたことに始まる。「障害のある全ての子どもに、教育を受けさせたい。その保障や場所を」という切実な願いで開設された。また、近隣住民の協力もあり、スクールバスを購入した(D養護学校, 2005)。

当時のD市市長は障害児教育に非常に理解が深く、1973(昭和48)年には「D養護学校設立委員会」が設立され、1975(昭

* 上越教育大学大学院学校教育研究科

和50)年に37名の児童で開校された。当時の校舎は、元中学校だった建物で、児童生徒の増加に伴いプレハブ教室で対応し、グラウンドも狭く、車いすの使用などからも新校舎の建設は急を要する状況であった。

開校当初の学校教育目標は、「個々の児童のもっている可能性を啓発し、自律的に行動のできる人間を育成する 1. じょうぶな子ども 心身ともに健康で、自分のことがしっかりできる子ども 2. 明るい子ども いつも明るく、みんなとともになかよく伸びていこうとする子ども 3. たくましい子ども 困難にくじげず、最後までがんばりぬこうとする子ども」とし、1984(昭和59)年までは踏襲された。

2年目からは、B校の教育課程の関連図に近いものが示され、総合学習を基本に、生活総合学習と題材学習で構成された。B校と異なるのは、養護・訓練として「機能回復訓練」が位置づけられたことである(図1)。

D校の1977(昭和52)年の週日課は、小学部低学年も高学年も帯状に「遊び」(55分)、「題材学習」(50分)、「生活合同」(30分)、「日常生活指導(給食)」(70分)、「日常生活指導(清掃)」(35分)、「日常生活指導」(30分)、水曜日は「合同体育」(155分)が設定された(表1)。低学年の下校は13:45で、高学年は午後「生活単元学習」(40分)が設定されて、下校は14:45であった。

以後、毎年週日課が変わった(表2・3)。養護学校義務制が施行された1979(昭和54)の週日課には、小学部に毎週月曜日「散歩」が位置づけられ、1982(昭和57)までの4年間続いた。また、「リズム」や「グループ学習」「課題学習」などが位置づけられた。

2 養護学校義務制から校舎建築まで(1980~1984)

D校は小学部のみで開校されたが、開校2年目に中学部が設置され、5年目の1979(昭和54)年に高等部が設置された。そして、1981(昭和56)年度から関連図が見直され、総合学習を基本としながらも、主に「領域・教科を合わせた指導」と「教科」で指導の形態を組織した図となった。その後、1982(昭和57)年からは教育課程の関連図は掲載されていない。代わって、「日常生活学習」「生活単元学習」「題材」「作業学習」「特別活動」「養護・訓練」などの枠組みで週授業時数が掲載されている。

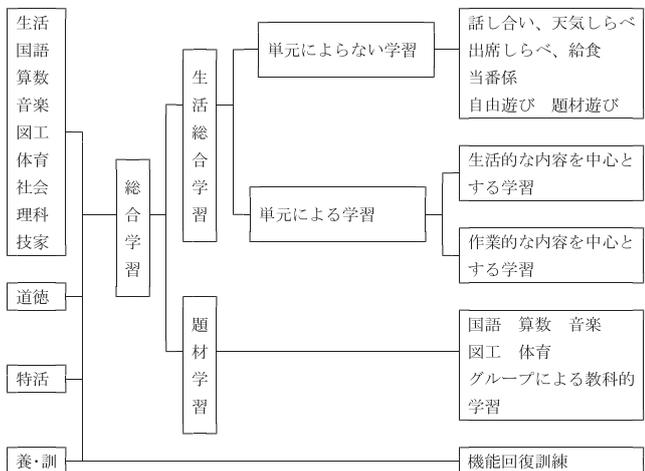


図1 1977(昭和52)年の教育課程の構成図

表1 1977(昭和52)年の週日課表

時間	小1~小3					小4~小6					中1~中2				
	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
9	登校					登校					登校				
10	遊び		合同体育		園工	遊び		合同体育		生活単元	遊び		合同体育		作業学習
11	題材		育		題材	題材		育		題材	題材		育		題材
12	日常生活指導(給食)					日常生活指導(給食)					日常生活指導(給食)				
1	日常生活指導(清掃)					日常生活指導(清掃)					日常生活指導(清掃)				
2	下校					生活単元学習					養訓				
3						下校					下校				

表2 1978(昭和53)年の週日課表

時間	小1~小3					小4~小6					中1~中2				
	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
9	登校					登校					登校				
10	朝あそび	全校体育	園工			朝あそび	全校体育	園工	生活単元			朝あそび	全校体育	園工	生活単元
11	給食指導					給食指導					給食指導				
12	日常生活指導					日常生活指導					日常生活指導				
1	下校					国語 生活指導					音 体 作 特				
2	歯みがき、そうじ、着がえ、連絡、移動					リズム、人形げき					音 体 作 特				
3						音・体					下校				

表3 1979(昭和54)年の週日課表

時間	小1~小3					小4~小6					中学部				
	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
9	登校					登校					登校				
10	朝散歩	合同学	園学			朝散歩	合同学	園学	生活			朝散歩	合同学	園学	生活
11	給食指導					給食指導					給食指導				
12	日常生活指導					日常生活指導					日常生活指導				
1	下校					題 機 音 音					音 体 美 作 作				
2	歯みがき、そうじ、着がえ、連絡、移動					リズム、人形げき					音 体 美 作 作				
3						音・体					下校				

日課表は、小学部の1時間目が「マラソン」「おはようリズム」が「朝の運動」となり、そのあとに「朝の会」が帯状に設定され、月曜日の「合同散歩」が高学年のみの「散歩」となった。また、「合同学習」や「グループ学習」の記述は認められなくなった。中学部では、「ランニング」が「体育」となり、午後に「社会」「理科」「クラブ」が設定された。高等部では、午前中の「グループ学習」「生活」がなくなり、「作業」の時間が多くなっているが、午後に「生活」「クラブ」が設定されている。

3 校舎建築から創立20周年まで(1985~1994)

新校舎は、1985(昭和60)年に落成し、「当時の新聞等では『父母、教師交えて設計』『県教育界に新風』『ユニークな養護

学校』南畑の『鐘の鳴る丘』などの見出しで報じられた」(D養護学校, 2005)。この校舎の特徴は、室内プール、欧風の多目的ホール、宿泊棟、ランチルーム、言語治療室、理学療法室、2階へのスロープを備え、芝生のグラウンド、小学部・中学部と高等部スペース(2階に教室、1階に作業室)を分けているところにある(図2)。

1985(昭和60)年の学校教育目標は、「個々の児童・生徒のもてる可能性を啓発することにより、障害にめげず自分の生活を切り開く力量を身につけ、社会の構成員の一員として、他と協調するバランスのとれた人格を形成し、自己実現していける人間を育成する」と変わり、「自律的に行動のできる人間」からより積極的に「自分の生活を切り開く力量を身につけ」「自己実現していける人間」を育成することを目標とした。

さらに、具体項目として、「ア. 体力や感覚・認知能力等、基礎的能力を高め、主体的に健康な生活をする人間の育成」「イ. 個人的及び社会・生産的生活場面で必要な技能にうらづけられた知識をもち、自律的に生活する人間の育成」「ウ. 協力する態度を身につけ、社会に参加していく人間の育成」「エ. 目的に向かってたゆまず進む強い意志をもち、自分の障害や困難を克服していく人間の育成」「オ. 情緒の安定をはかり、明るく誠実で豊かな心情・表現をもつ人間の育成」が掲げられた。

また、学校教育目標を受けて、子どもにもわかる児童生徒像が引き続き、次のように示された。

- ア. じょうぶな子ども - 心身ともに健康で、自分のことがしっかりできる子ども
- イ. あかるい子ども - いつも明るく、皆と共に仲良く伸びていくとする子ども
- ウ. がんばる子ども - 困難にもくじけず、すすんで学習し自立しようとする子ども

翌1986(昭和61)年の学校教育目標には、「児童・生徒一人一人の可能性」と「実践的人間を育成する」の文言が加わった。また、各具体項目に「ア. 健康」「イ. 知恵・自立」「ウ. 意志」「エ. 情操」「オ. 協調」のタイトルがつけられた。

1989(平成元)年には、児童生徒像として「ア. じょうぶな子ども - 安全に気をつけ、心身ともに健康な子 イ. あかるい子ども - いつも明るく、友達と仲良くできる子 ウ. がんばる子ども - 困難にもめげず自分の力を発揮できる子」をあげ、基本教育目標・指標として「児童・生徒一人一人の可能性を啓発し、障害にめげず、生きる喜びを味わわせながら積極的に物事に取り組み、実践的で充実した社会生活のできる人格円満な子どもの育成をはかる」を掲げた。

具体項目も、「①健康 - 体力や感覚等の基礎的能力を助長し主体的に健康な生活のできる子どもの育成」「②自主 - 常に知的能力の向上をはかり、特に社会的知識や技能を身に付けさせ、自分で考え行動できる子どもの育成」「③情操 - 明るく思いやりがあり友達とともに頑張れる子どもの育成」「④協調 - 社会の決まりを理解し、それを守って行動できる子どもの育成」となった。

そして、教育計画の立案と指導の方針として、①学校教育目標の具現化、個性化をめざして学部経営にあたる、②一人一人の子どもを中心にすえた指導をする、③子どもに即応した指導をするため多様な学習活動を展開する、④指導上の留意事項

(生徒指導、教科指導、特別活動、生産的学習、進路指導、校外学習、安全指導、重複障害児の指導)をあげた。これらは多少の表現の変化はあるが、現在まで掲げられている。

1985(昭和60)年からは学習形態別週間授業時数が掲載され、総合学習として「日常生活、遊び学習」「生活単元学習」「作業学習」が大きな割合を占め(39~61%)、教科別学習として「音楽」「図工美術」「体育」(12~19%)、課題別学習として「国数等」「養護・訓練」(20~25%)、「特別活動」(2~7%)であった。年度によって時間数や割合は変動したが、ほぼ同様な表が掲載された。また、開校以来研究紀要を発刊し、「生き生きとした学校生活をめざす教育課程の研究」をテーマにした実践研究が進められた。

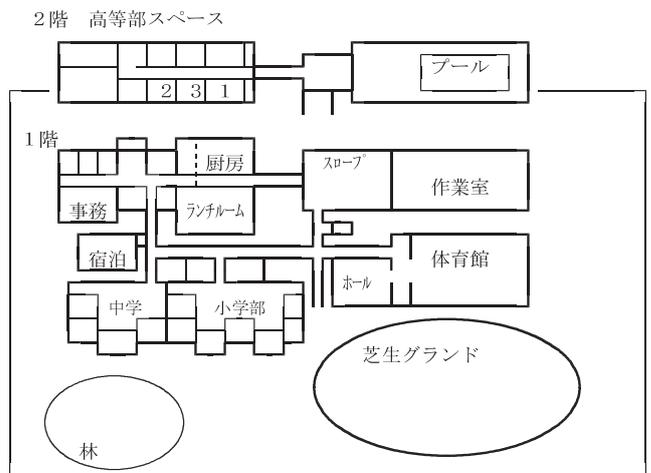


図2 校舎の配置図

表4 2004(平成16)年の年間総授業時数及び週授業時間数

(1) 小学部

区分	学年	学 年						重複学級
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	
領域・教科を合わせた学習	日常生活学習	13.3	13.3	13.3	12	12	12	13.3
	遊び学習	5.3	5.3	5.3	4.2	4.2	4.2	5.3
教科別の学習・題材学習	生活 国語 算数	5.3	5.3	5.3	7.2	7.2	7.2	4
	音楽 体育	※	※	※	※	※	※	※
領域別の学習	道 徳	※	※	※	※	※	※	※
	特別活動	8	8	8	8.5	8.5	8.5	4.3
	自立活動	※	※	※	※	※	※	※
合 計(週授業時数)		31.9	31.9	31.9	31.9	31.9	31.9	31.9

※「道徳」「自立活動」は、各領域・教科の指導に合わせて実施する。

(2) 中学部

区分	学年	学 年			重複学級	訪問学級
		1年	2年	3年		
領域・教科を合わせた学習	日常生活学習	10	10	10	10	1.2
	遊び学習					2.1
	生活単元学習	(1)	(1)	(1)	(1)	
教科別の学習・題材学習	作業学習	1.5	1.5	1.5	1.5	
	国語 社会 数学 理科	3.5	3.5	3.5	3.5	
	音 楽	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
	美 術	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
	保健体育	3.4	3.4	2.4	1.0	
領域別の学習	道 徳	※	※	※	※	※
	特別活動	7.1	7.1	7.1	6.1	1.2
	自立活動	※	※	※	3.4	1.8
総合的な学習の時間	1	1	1	1		
合 計(週授業時数)		28.5	28.5	28.5	28.5	28.5

※「道徳」「自立活動」は、各領域・教科の指導に合わせて実施する。

※「生活単元学習」は、学校行事の事前学習及び事後学習を年間35単位時間実施する。

(3) 高等部

区分	学年	学 年			重複学級
		1年	2年	3年	
領域・教科を合わせた学習	日常生活学習	11	11	11	11
	生活単元学習				
	作業学習				
教科別の学習・題材学習	国語 社会 数学 理科	5.3	5.3	5.3	5.3
	音 楽	0.8	0.8	0.8	0.8
	美 術	1.3	1.3	1.3	1.3
	保健体育	2.7	2.7	2.7	2.7
	家庭科	1.3	1.3	1.3	1.3
	職 業	2.4	2.4	2.4	2.4
	道 徳	※	※	※	※
領域別の学習	特別活動	5.5	5.5	5.5	5.5
	自立活動	※	※	※	3.4
	総合的な学習の時間	(16)	(16)	(16)	(16)
合 計(週授業時数)		30.3	30.3	30.3	30.3

※「道徳」「自立活動」は、各領域・教科の指導に合わせて実施する。また、「総合的な学習の時間」は、題材学習の中で設定して行う。

1989(平成元)年には、本校の目的が「精神薄弱、肢体不自由等の障害児に対し、学校教育法に基づき初等・中等教育を施すことを目的とする総合的な養護学校である」と示されている。

4 創立20周年から現在まで(1995～)

1995(平成7)年には創立20周年を迎え、開校20周年記念式典、埼玉大学教授西村章次氏による記念講演、そして、記念誌「みちしるべ」が発刊された。1996(平成8)年の学校教育目標は、児童生徒像として「げんきな子ども」「あかるい子ども」「がんばる子ども」が示され、基本教育目標・指標が継続して掲げられた。

2002(平成14)年には、学校週5日制が実施され、改訂された学習指導要領に沿った教育課程が編成された。2004(平成16)年から週授業時数が領域・教科を合わせた学習、教科別の学習、領域別の学習、総合的な学習の時間の枠で掲載され、現在に至っている(表4)。しかし、日課表は毎年度学部ごとに検討され、名称や時間帯など若干の変化がみられる。

2006(平成18)年から、本校の目的の前に「目指す学校像(ミッション)」が示され、「専門性のある教育力のもと、センター的機能を発揮し、保護者・地域の期待に応える学校」としている。そのミッションは2008(平成20)年に「特別支援教育の力を発揮し、保護者・地域に信頼される学校」と変わり、2009(平成21)年に校名がD市立D特別支援学校となった。

IV 考察

D校は、義務制前から重度・重複障害児を受け入れ、総合学習を基本とした教育課程を編成してきた。また、子どもの実態に応じた多様な学習活動が展開でき、小・中・高等部ごとに生活ゾーンを分けた校舎建築を行ったことも特徴的である。さらに、学校研究でも教育課程をテーマとして掲げ、授業ごとの指導内容を検討してきたことが特徴としてあげることができる。

D校が開校された1975(昭和50)年は、養護学校義務制以前であり、埼玉県内の知的障害養護学校は4校のみであった。その内、高等部のみの市立校と小・中・中学部のみの市立校、県立校1校で、同じような規模であったB校の教育課程編成をモデルにしたことが考えられる。教育課程の関連図はほぼB校に近いもので、総合学習の考え方を基本におき、生活総合学習と題材学習で構成されている点からもわかる。ただし、B校よりも障害が重く、肢体不自由のある児童生徒がいたことから養護・訓練として「機能回復訓練」が位置づけられたことは大きく異なる点である。

また、日課表をみると、年度によって大きく変化している。特に、開校当時から校舎建築の頃は、これまでも教育の機会を得ることができなかった児童生徒が入学してきたこともあり、児童生徒の実態をとらえることとその実態にあった教育内容を選択・組織することもむずかしく、教育方法についても試行錯誤の状態が続いたのではないかと考える。そのなかで、1979(昭和54)年の週日課に「散歩」が4年間位置づけられ、「リズム」や「グループ学習」「課題学習」なども先駆的に位置づけられていた。

さらに、小学部の1時間目に「朝の運動」と「朝の会」が帯状に設定され、中学部では「体育」「社会」「理科」「クラブ」

が設定され、総合学習や生活を中心とした考え方を踏襲しながらも、教科の系統性を重視していこうという流れも読み取れる。

校舎建築以後は、学校教育目標の具体項目に健康、知恵・自立、意志、情操、協調という教育内容を領域としてとらえ直そうという方向がみられる。そして、その方向をより具体化していくために、「学校教育目標の具体化、個性化をめざして学部経営にあたる」とあるように、各学部を中心に実践化していく方針がとられた。それは、校舎建築の際に各学部別の生活ゾーンに分けたことも大きく影響しているのではないかと考えられる。

小学部と中学部の各教室は、平屋で隣り合わせに設置されている。高等部の教室は、本部棟の2階に配置されている。作業室は、1階の教室から離れた場所にある。小・中・高等部が共有で使用するランチルーム、体育館、グラウンドは、それぞれの学部に近い場所に設置されている。その他に、宿泊棟があり、屋内プール、欧風の多目的ホール、言語治療室、理学療法室もある。このように、多様な授業実践を可能にする施設・設備があることも、D校の特徴となっている。校舎の敷地全体としては、広いとはいえないが、児童生徒の動線が長くならないように考えられた配置となっており、多様な施設・設備がなされている。

また、開校以来研究紀要を発刊し、「生き生きとした学校生活をめざす教育課程の研究」をテーマとした実践研究を進めてきた。継続的な学校研究が教育課程編成に果たしてきた役割は大きいと考えられる。

そして、2004年からは週授業時数が領域・教科を合わせた学習、教科別の学習、領域別の学習、総合的な学習の時間の枠で掲載され、現在に至っているが、校舎建築の際に各学部別の生活ゾーンに分け、「学校教育目標の具体化、個性化をめざして学部経営にあたる」とあるように、各学部を中心に実践化してきたことが大きな特徴であるといえる。

付記

本研究の遂行に際して、D校第三代校長(1984～1988)立石幸人氏より貴重な情報をいただきました。厚く感謝申し上げます。また、現在の校長川勝義彦氏にご協力をいただきました。感謝申し上げます。

文献

- D市立D養護学校(2005)創立30周年記念誌「ともに輝く」。
 齋藤一雄(2012)埼玉県における養護学校義務制前後の知的障害教育課程の編成。上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要、18、1-8。
 齋藤一雄(2013)埼玉大学教育学部附属養護学校の教育課程の変遷。上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要、19、13-18。
 齋藤一雄(2014)養護学校義務制前後の教育課程編成の変遷—E校の教育課程編成の変遷—。上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要、20、27-32。